

満州

生涯を開拓に託した私の人生

北海道 穴澤 武雄

渡満の動機

私は大正七（一九一八）年十月、新潟県古志郡上塩谷村の平中野侯という田舎で、父源太郎、母ヨカの五男として生まれた。昭和七（一九三二）年に地元の高等小学校を卒業し、姉の嫁ぎ先で農業を手伝いながら農業補習学校に入ったが、昭和八年四月、上京のため中退した。東京では米穀商に就職して働いていたが、昭和十四年四月に長兄から満州開拓に行こうと誘われたので、参加するために退職して一旦郷里に帰った。

五月に長岡市で県庁の係員の審査を受け、兄と共に合格した。

当時、新潟県では第九次の開拓団を三個団編成する計画を立てていて、私達は魚沼三郡と古志郡との分郷への参加が決まり、その先遣隊として現地訓練所に入所し、必要な訓練を受けることになった。他の二個団の先遣隊員と合わせて約八十人近い人員が、新潟県知事などの激励を受けて、新潟港から「満州丸」に乗船、勇躍して満州に向かった。

昭和十二年七月に勃発した日支事変は、政府の不拡大方針とは裏腹に日に日に拡大して、中国大陸を進攻する日本軍の勝利が新聞やラジオで報道されていたが、世界が見る日本は、正義の戦争をしているとは認識していなかった。日常生活も徐々に不自由が多くな

り、生活必需品も手に入り難くなってきた。勤めていた米穀商でも米の取引が窮屈になり、まだ配給制にはなっていないもの、職業柄そんな情報も頻繁に入ってきて、何となく先行きの食糧事情には不安を感じていた。昭和十三年には徴兵検査を受けたが、私の周囲のほとんどの若者は入隊し、ほどなく戦地に向かっていた。私はどうしたわけか徴兵を免れていた。

故郷の上塩谷村は山間の寒村で、農地が少ないために、従来から分家は作らないという不文律のある土地柄で、跡取り以外の者が土地を持つということは有り得なかった。農業補習学校で農業技術を習得していた私にとっては、兄と共に満州に渡り、広い土地で農業を営む夢を実現するには、この機会を逃してはならないというのが、海外移住渡満の決心をした動機であった。

西火犁開拓団での生活

新潟港を起航した私達の一行は、日本海を渡り北朝鮮の清津に上陸、^{トモヒ} 凶門、^{オクシコラ} 牡丹江、^{ハルビン} 哈爾濱を経由して浜

北線の通北駅に昭和十四年七月に到着、トラックに分乗して現地訓練所のある第六次五福堂開拓団本部に至り、堀忠雄団長の歓迎の挨拶を受けて、各団ごとに分宿することになった。私達は、南魚沼郡出身者で構成している部落の宿舎に入り、満州開拓団での第一夜を過ごした。

そこで、^{シヤキリ} 哈爾濱幹部訓練所から来ていた小池佳嘉さんから、私達は西火犁地区に入植することが決定したので、一月末に哈爾濱を経由して五福堂に来るようにと指示された。小池さんは、一月末に正式に西火犁開拓団の団長になられて、二月に結団式を行った。二竜地区、東火犁地区の開拓団への入植が決定した人達も、それぞれの目的地に向かって出発した。

私達が入植した西火犁地区は大草原地帯で、満州事変以前にロシア人が一時開拓をしていたことがあったが、その名残として畑に畦の跡があり、集落のあったところも見受けられた。新しく開拓して建設していくことは大変な仕事なのだとしみじみ感じたものだった。西火犁の地名の由来は、ロシア人がトラクター

(火犁)を使って開墾したのでそれがそのまま地名になったという。そのくらい、完全な荒地であった。

五福堂開拓団の隣接地に居住していた現住民の住宅を借り上げて仮本部、仮宿舍とし、そこから西火犁地区に通って移住の準備をすることになった。県公署警務科から小銃二十五丁と拳銃二丁が貸し付けられて、結局、終戦まで先遣隊の者達が管理していた。

当時、小興安嶺の山中には「反滿抗東北救国第二軍」と称するゲリラ部隊の本拠があった。隣接の第六次流老街基崎玉開拓団は、数度にわたってゲリラによる襲撃を受け、犠牲者も出ていたとのことだったが幸いにも私達の所では、一回放火されただけであった。昼夜にわたる警備を二年ばかり続けたが、奥地の柳毛溝地区に三個の開拓団が入植したので私達の警備は中止になった。

四月までは現地に入ることはできず、五福堂の仮宿舍から通いながら、屋根をふくための羊草刈りなどの作業をしていた。そのうちに満拓公社からトラックを借り受けたため、それに乗ってようやく現地に入れる

ようになり、仮本部の位置を選定した。

生活に一番必要な井戸は、現地の中国人と井戸掘りの委託契約を結び、四月上旬に完成した。これで本腰を入れて五福堂からの移転の準備が開始され、板囲いで草葺き屋根の仮共同宿舍と炊事場、仮本部事務所などを建て、五月の中旬とりあえず五福堂から移転した。開拓団としての体制が一応整備された形となった。六月になると補充先遣隊が内地から二十五人程到着し、開拓団内は活気づいた。それぞれの責任分担を決め、建設作業も順調に進んでいた。

本部部落の建設を第一年度計画として、共同宿舍二棟、車庫、診療所、それに二戸一棟の個人住宅十三棟、井戸二本、共同炊事場、共同浴場などを、私達と業者の手によって完成させた。建築用のれんがは、現地に製造を委託し、地区内で生産して利用していた。

五月になると、満拓公社のトラクター班が開墾を開始した。まず手始めにソバを播種したが、収穫はなかったようだった。越冬用の野菜類については十分に

収穫ができたという話だったが、私は経理係をしていたので農作物関係についてはよく分からなかった。

七月に入ると、新潟県分郷計画の地域から、応援作業班として男子十五人、女子五人の計二十人の人達が来て奉仕作業をしたが、八月には新潟に帰ってしまつた。十月になると、不足していた施設も大方完成したので、仮施設からの移動を開始したが、これらの施設はほとんどが業者の手によって建設されたものだった。居住施設も完成し、団としての形がおおむね整つたので、十月から年末にかけて、妻帯者達は家族招致のためそれぞれの郷里に帰って行つた。残留団員は少なく、昼夜の警備は大変な仕事となつた。

二年目に入ると、本部事務所、幹部宿舍、れんが積みの小学校や、農産加工場などの建設が完了した。第二部落、水田班の第三部落の三十戸単位の個人住宅二カ所も建設を完了。満拓公社の測量係によって水田用水路の測量が実施され、昭和十七年にはかんがい用水路も完成した。この作業は吉林省から来た水田耕作に経験のある朝鮮人労働者の手によるものであった。昭

和十六年には畜産指導員や保健指導員もそれぞれ着任し、開拓団としての陣容は完全に整備された。

私は、昭和十六年四月に、結婚のため一時帰郷し、五月には新妻を伴つて西火犁に戻つた。同じように家族招致のため帰国していた人達もそれぞれ家族を連れて戻ってきたので、団内は一段と活気づいてきた。二カ所に完成した部落に分散し、開拓団共同経営から部落共同経営に移行したが、経営は順調に進展していった。朝鮮から使役用の牛が五十頭近くも導入されて各戸に配分され、農耕作業もようやく人力から畜力に移りつつあり、毎日の仕事も多少は楽しくなってきた。

昭和十七年には、さらに新しく二カ所の部落を造成する計画が立てられた。また、軍用保護馬の調教委託では、九州産の日本馬に随分手こずり、苦勞したものだつた。乳牛も導入され、十八年には我が家でも二頭飼いはじめた。一頭はエアシャー種、他の一頭はホルスタイン種で共に搾乳し、翌年には牝の子牛が誕生した。さらに一頭導入するなどして増頭を図つた。

昭和十八年になると、団内でも応召者が増えてき

た。翌十九年、そして翌々年の昭和二十年にかけてついに根こそぎ動員となり、各部落とも男子は年配者が四、五人しか残らなくなって、農業生産もがた落ちしてしまった。本部も、団長と農事係と経理係の私とのわずか三人になり、全く大変な事になったが、こんな事態になってもまだ、誰も戦争に負けるなどとは想像もしていなかった。

昭和十五年に現地入植以来足掛け六年、慌ただしく建設を進めてきた結果が、開拓団の崩壊という終末を迎え、満州開拓の夢は消え去りつつあった。

終戦そして避難行

八月十三日には、西火犁地区より約五キロメートル程奥地に入った鶏走河曙開拓団の方面に焼夷弾が投下されて、「いよいよソ連軍が近づいてきたな」と皆で話し合っていたが、その後しばらくは何事もなく過ぎた。

八月十五日には例年のとおり本部前で部落集会を実施していたが、珍しく飛行機が飛んでいるのを見て、「まだ日本の飛行機もあるのだ」と皆で話していたが、

それはハルビン方面に向かっているソ連軍の飛行機だった。ラジオも無く電話も無く、今日重大放送があった終戦になったことなど誰も知らなかった。私は十六日に、通北駅前にある満拓公社の地方事務所に入申込資金と、連合会からの物品を受け取りに出張した。五福堂と西火犁の間の湿地帯に架かっている橋が八月六日の集中豪雨で流されたために、苦勞して徒歩で湿地帯を渡り、ようやくのことで通北駅に着き、満拓事務所に入った。事務所では北海道出身の阿部さんから一万五千円を受領、物品も中国人の馬車に積み込んで団に帰るべく駅前を出発したが、その日は友人の馬玉龍さんの家に泊めてもらった。

その途中で酪農開拓団の岡田さんに会い、「日本は戦争に負けて降伏したそうだ」と言われたが、私は半信半疑だった。しかし、城内の十字路で、県公署警務科の大使館地方兵事員の新潟県出身の南雲さんから、「日本は無条件降伏をしたそうだから、団に帰ったら報告するように」と言われ、初めて事実であることを知った。この辺りの道に詳しい馬夫のおかげで旧道を

通つて無事に団本部に戻つたが、通北の東門を出る時は、立哨している警官も普段と変わりなく通してくれ、たし、歩いている現地人も、表面的には何ら動揺していなかった。

団に着いて早速団長に報告したら、「神州は不滅だ、今さら何を馬鹿なことを言うのだ！」ときつづく叱られて私の言つたことは信用されなかつた。しかし、その日の午後になってハルビンに召集された五人の団員が「日本は降伏して、もう入隊の必要がないので除隊になつた」と戻つて来たので、さすがの団長も涙を流して呆然と立ちつくしてしまつた。その姿は今でも忘れることができなかつた。早速、各部落の責任者を集め協議したが、先の見通しも全然つかず、県公署からも何の連絡も無く、ただ手をこまねくだけだつた。

八月十九日頃、五福堂から武器の取り扱いについて連絡があり、通北県公署内にある治安維持委員会に返納するようにとのことで、二十五丁の小銃と弾薬を八月二十一日に返納した。返納する時も城内は普段と変わらない状態で、我々に危害を加える者もなく全員無

事に戻り、敗戦の実感ほ沸かなかつた。

その後、各部落は団本部の部落に集結し、馬や役牛、乳牛、その他の家畜はほとんど放してしまつた。不平を言う者も無く、平穏な日々が続ぎ、作付けしてある農作物はできるだけ収穫することとして、来るべき冬に備えた。だが、ここを出て南下することもあるかもしれないということ、最小限の荷物は準備しておくようにしていた。団の倉庫にある食糧は全部配分し、金庫の金は各部落の責任者が分割保管して南下時に備えることとなつた。集団生活のために定めたことは皆守つてくれたが、これは皆が知り合ひだつたからだと思ふ。八月、九月は年寄りが二人ほど亡くなつたが、それ以外は病人も出なかつた。

十月に入つて間もなくのこと、西火犁地区内にあつた新潟県報国農場が土民の夜襲を受けたので、翌日、本部に避難してきて、各戸に二、三人ずつ分泊することになつた。そのうちに東火犁と西火犁の中間にある第十三次仙田村開拓団の人達も集まつてきたので、西火犁は大変な人数になつたが、こうなつたら成り行き

に任せるほかはなかった。それから毎晩、夜警を始めるようになった。十月の半ば頃、治安維持委員会からといって一人の中国人がやって来て、全員集まるように、ということ、本部前に男子だけが集まった。

「何が不足しているか、困っていることは」などと尋ねて帰ったが、私は以前、れんが寮の責任者の蘇志立の所を時々訪ねていたが、彼はそこで働いていた男で顔は知っていたので、それほど疑うこともしなかった。今考ええると、男性の人数などを調べる目的だったのではなかったかと思う。

翌年、北安の黒龍江省主席公館で働いていた時に、北安の市街で彼とばったり会った。彼は軍服を着ていたので聞くと八路軍に入っていると聞いていた。通北にいたころは国民党だったはずだと思ったが、彼は私が省政府で働いていることを知ると驚いて、詳しい話もせずに「再見^{ツァイチェン}」と言って去っていったことがあった。

話を元に戻して、終戦の年の十月末頃のある日の白昼、「晴天白日旗」を持った騎馬隊を先頭に、治安維

持の保安隊と称する三十人くらいの一段が団本部の前に来て、門を開けるように申し入れて来たので、致し方なく開門したところ、「男性を全員集める！」と指示した。全員が集まった所で、団長、校長、渡辺医師、そして本部員である私など数人の手を後ろ手にして縛り、警備詰所にしていてた車庫の中に入れた。その他の男性も全員別の倉庫に押し込んで鍵をかけ、外に出られないように監視していた。詰所に閉じ込められた私達は次々と名前を呼ばれて一人ずつ外に出されたが、そこで彼らは「金を出せ！」と要求した。私もモーゼル一号の拳銃を背中に突き付けられて金を要求された。妻が金の隠し場所を私に教えてくれており、私は仕方なくその場所を教えたので有り金を全部取られてしまったが、そのお陰で何事もなく詰所に戻された。しばらくすると門の外が騒々しくなってきたので、耳をそばだてると、団内にいた保安隊と称する連中が、外に向かって発砲していた。門外からも中に向かって発砲し、銃撃戦となり、保安隊側も一人の死亡者を出して他は逃亡してしまった。解放された私達

が、今度は外の一団を入れたところ、友人だった通北の賈継山が先導する治安維持会の保安隊で、全員満警出身の人達で二十人ほどの一団だった。晴天白日旗を持っていたので、当時の通北の人達は国民党だったと思う。別の友人の馬玉龍は、馬占山將軍が戻ってくると言っていた。この辺りは満州事変以前は、馬占山の支配地域だったそうで、馬占山の人氣は高かった。治安維持会の人達は、先の偽保安隊は全然知らない連中で、多分北安方面から来たのだろうと言っていた。団の事情に詳しい現地人の手引だったと思う。

湿原地帯の水が引くと、自由に馬車も通れるようになり、治安はだんだんと悪くなってきた。前の事件から一週間くらいして、早朝に二回目の襲撃があった。男性全員が門の所に集まり、騎馬隊を先頭に二、三十人の一団が近づいてくるのを見守った。その時、部隊から脱走して団にたどり着いた日本兵五人の中の一人が、持っていた手榴弾を一発投げたが不発になった。彼らは、銃を乱射しながら門を破って入って来た。こっちは武器は全部返納してしまっただけで逃げ回る他

はなく、運悪く五人が銃弾に倒れ犠牲となり、尊い命を落としてしまった。この騎馬隊は、馬車を仕立てていたので略奪が目的だったようで、最初の組とは別の集団だった。それから数回の襲撃があったが、みんな別の方面からだった。

日中に襲ってくることはほとんどなく、夕方から来るようになったので、その都度サイレンを鳴らして合図し、土塁の外の草っ原に逃げて、彼らが略奪して引き揚げたのを確かめてから戻った。彼らは食糧や炊事用具などは持って行かずに、衣類などの布製品を狙っていた。布団は中の綿は捨てて表側だけ持って行った。私達もだんだんと着るものがなくなり、哀れな姿になってしまった。十一月の末頃に襲ってきた集団は、引き揚げる際に建物に放火していった。共同で暮らしている私達には大きな災難で、特に女性達は大変に動揺していた。何とかしなければと対策を考え、南下できるかどうか通北駅へ状況把握に行くことに決めた。その役目を私と茨木君の二人が仰せつかり、八月二十一日以来の外出となった。団本部から徒歩で約二

十五キロメートルもある通北駅に向かった。途中は何の異常もなく通北街の東門に着いたが、警備の詰所は無人で、十字路付近の商店街も全部閉まっていた。不審に思いながら駅まで行って聞いたところ、治安が悪くなり列車も不定期で、集団での南下は不可能だと言われた。その日は実験農場の小西さんの家に泊めてもらい、治安、暴動、迫害などの状況を聞いた。県公署の日系職員、満拓社員、第六次老街基埼玉開拓団、克東県の張文封と花園の両開拓団、それに白家鉄道白誓村の人は九月に南下したが、小西さんほか数人の実験農場の人は残留させられたとのことだった。県公署開拓科時代の田中股長も残留し小西さんの家にいたが、事情は話されなかった。その後どこかに連行されたと聞いたが、それからの消息は分からない。翌日、団に帰る途中に南門の所で二、三百人の兵隊の一団を見た。灰色のだぶだぶの服装であまり兵隊らしくない姿だったが、八路军であった。それで無人状態の訳が分かった。居留民会の事務所に立ち寄り、東火犁開拓団の萩原畜産指導員から色々情勢を聞いたが、やは

り南下は無理だということだった。団に帰り報告した結果、五福堂に集結することになった。

代表者が五福堂に行つて許可をもらい、移動が決定し、昭和十五年の入植以来、足掛け六年営々として築いた西火犁開拓団を放棄して涙ながらに五福堂に向かった。五福堂の皆さんは温かく受け入れてくれた。

五福堂への移動

準備された一棟の宿舎に三十人ぐらゐが入つたが、西火犁や報国農場から来た働ける者は、県政府やソ連軍の使役に出た。私も十二月中旬から報国農場の青年達と県政府庁舎周囲のバラ線張りに従事した。かつて県公署時代には職員宿舎だったところで、仮眠中に銃撃戦が始まり、バラバラと弾が飛んで来たが幸い我々には当たらなかつた。銃撃戦は一晚続き、朝方になってようやく収まり、国民党系集団の襲撃と噂された。翌日帰つた頃は、ちょうど国民党と八路军の内戦の最中で、通北駅でも事件があつたと言われていたが、詳しいことは不明だった。五福堂に移つてからは襲撃事件は一度も起きなかつたが、通北駅に駐留して

いたソ連軍の若い兵隊が二、三人でグループをなして、中国人の馬そりに乗って暴行目的で頻繁に現れた。その都度、団の女性は草っ原の方に避難したが、冬なので大変だった。その後に対策が考えられたので、年末頃には兵隊は現れなくなった。

北安での酪農作業

昭和二十一年一月の始めだったと思うが、居留民会の堀忠雄会長（五福堂開拓団長）から「黒龍江省政府の命令で、中国語が理解できる酪農の経験者を一人差し出すように、との指示があった。何とか行ってもらえないか」と依頼された。通北実験農場の乳牛三頭を陸送するためとのことだったので、二、三日で帰って来れるだろうと高をくくって引き受け、報国農場の二人と共に翌日県政府に行き、八路軍兵士一人の護衛で一頭ずつ手綱を取って、通北を十一時に出発し、北安に向かった。夕方には白家屯に着きそこで泊まることになって、乳牛に谷草、粟穀を与えて休んだ。そこでは大変に親切にしてもらい、護衛の兵士と同じ扱いを受け、人情に困境なしと痛感した。老婆の部屋で三人

一緒に休ませてもらったが、夜中に老婆から「騎馬隊が近づいている」と言われて外に飛び出し、案内された粟穀の中に隠れて騎馬隊の通り過ぎるのを待った。

五十騎くらいの一団だったが、部落の人達も何者か分からないと言っていた。幸い通過していったが、多分国民党の部隊だろうと思った。朝、絞った牛乳をお礼にして、北安に向かって出発した。足の遅い牛を連れてのことだったので、日が暮れかかる頃にやっと北安に着き、元開拓会館だった所に連れていかれた。牛の受け入れ準備がされていなかったので、すぐに干し草の手配をしてもらい、満拓社員の寮だった所に牛を入れ、夕方の搾乳をして渡したが、家畜に対する知識が何も無いのに驚いた。分曉前の一頭と報国農場の二人は供給部の方に回され、私だけが残ることになった。私が徴用された理由を、日本語が少し分かるシヨウ邵という青年に質問したが、彼の説明によると黒龍江省政府主席が飲む牛乳を生産するためだという答えであった。北安の街には白系ロシア人が経営する牛乳屋があったが、品質が悪く、政府で自給生産をすることになった

とのことだった。

元の浜江実業銀行が省政府高官の宿舎になっていた、陳太凡主席もそこで起居しており、常時二人の護衛が付いていた。衛兵も八十人くらいいたが、軍隊なのか警察なのか分からなかった。そこに炊事当番が四人いたが、私もそこに泊まるように言われた。翌日、主席住宅総務科という役所の趙科長に、通北に帰してくれるよう頼んだが、当分の間ここで留用するので働けと命令された。一月末になると科長から、近く家族を呼び寄せるから手紙を書くように言われて準備をした。そんなとき、通北県長が省政府に出張してきたからと、わざわざ立ち寄ってくれたので、手紙を言付けた。その後、省政府の差し向けた馬車で、私と兄の家族全員が北安に来て、滿拓社員寮の一室に落ち着くことになった。兄は大工の経験があったので、家具などの修理を引き揚げるまで続けていて、大変に助かったと後に話していた。

家族が到着した晩に主席がわざわざ訪ねて来て、頑張ってくれるようにと励ましの言葉を掛けてくれたの

にはびっくりするとともに恐縮してしまった。ここに来てから一生懸命に乳牛を管理し、毎日主席の牛乳を生産している働きが認められたのだと思った。三月になると科長から履歴書を出すようにと言われ、正確に書いて提出したところ、「黒龍江省政府、牛奶工員を命ずる」という辞令を受けて、省政府職員の特遇を得ることになった。

四月になるとソ連軍が完全に撤退して北安も落ち着きを取り戻し、中国の女性も自由に外出するようになった。私が北安に来た頃には日本人はほとんどいなかったが、各地から避難してきて居留民会もできた。私は、日本人との接触を禁じられていたので居留民会の内容についてはよく知らないが、会費だけは納めていた。黒河の日本軍の収容所から来た人が会長だったが、その人の話では、健康状態の悪い人は捕虜としてシベリアには連行されず、ここまで馬車に乗って来たとのことだった。ソ連軍は撤退する際に、北安から黒河までの北黒線のレールを全部はずし枕木だけを残していたので、北安への南下は随分苦勞したそうだ。

黒龍江にレールを敷いて北滿からの物資を運んだらしい。

暖かくなってから、日本商社の建物や倉庫を畜舎に改造して移った。宿舎はれんが造りで、水道や電気もあつたので大変に助かった。中国人の助手が付いたため、牛の管理、牛乳の処理などが楽になった。私の次男もここで生まれ、主席からお祝いに白米をもらい、牛乳も飲ませて良いと言われたため、栄養も良く、健康に育てることができた。五月になると青草も伸びて、刈り取って粟穀に混ぜて牛に食べさせたところ、乾乳期に近いのに乳量が増えた。そのうちに、品種の定かでない乳牛を一頭補充したが、ホルスタインのようには生産できなかった。褐色だったので、蒙古牛だったのかもしれない。気が荒く厄介な牛だった。

婦国の旅立ち

九月に入ると、居留民会から婦国の話があり、手続きするように言われたので科長に話したところ、主席の許可がなければ婦国はできないとのことだった。科長は、相談はしてみるとということだったので期待をし

ていたが、なかなか許可が下りなかった。主席は来年にはハルビンに移動するので、私も一緒に連れて行くことにしているからという理由だった。しかし、他の人達からは、今、集団で婦国する機会を失うと、個人で引揚げをすることは大変に難しいと教えられた。私は何としても帰りたいと思ひ、西^シ民政庁長に、「家族がどうしても婦国したがっている」という理由で直接に願ひ出て、主席に頼んでもらった。間もなく主席から婦国の許可が下りた。庁長はかつて早稲田大学に留学して日本語も理解できる人だったし、彼の奥さんもよく私の家族のところ遊びに来ていて、私達の理解者でもあつたことが幸いしたのだと思つた。

それから婦国準備が始まつた。助手には牛の管理方法などを詳しく教え、飼料の与え方についても細かく話した。八カ月の短い期間だったが、牛も良くなれていて、人と別れるのと同じようにつらかった。同僚は「道中は、ニンニクを食べながら行けば病気になるない」などと色々教えてくれた。また、省政府からは退職金として百五十元が渡された。わずかな期間だっ

たのに破格の待遇であった。当時の一般労働者の月収が三十元くらいだったから、本当に破格であった。

九月十四日、省政府前に各方面から引揚者が続々と集まり、氏名札を渡されて胸のところに縫いつけた。

その夜は食事を与えられ中国人の経営する旅館に泊まった。翌十五日、午前十時に再び駅前に全員整列して所持品検査を受けたが、金物類ははさみのような小さな物まで没収された。

私達の乗った列車は引揚者だけの専用列車で、中国人は乗車しなかったのでゆっくりと腰掛けられたが、随分汚れていた。どのくらいの客車を連結していたか知らないが、通北駅からも通康駅からも多数の引揚者が乗車した。翌日にヘルビン駅に到着、しばらく停車していたが、若い女性は全員降ろされ、看護婦要員と言われどこかに連行された。兄の長女は、ちょうど水を汲みに行っていたので連行を免れ幸いだった。間もなく発車したが、唐頼松で停車して降ろされ、三キロメートルばかり歩かされて第二松花江（シホウカコウ）の川岸に着いた。国共内戦で八路軍が鉄橋を破壊したからというこ

とだった。第二松花江は流れも静かで、乗った渡し船も大きかったので各班ごとに整然と渡り、小高い丘を越え、待機していた石炭運搬用貨車に再び乗せられて長春（新京）に向かった。

長春では、女、子供は馬車に乗り、男性は徒歩で日僑収容所に向かった。収容所は以前の政府官吏宿舍だった緑蔭官舎という所で、立派な建物であった。そこに十二、三日ほど留められ、次の収容所のある錦州に行った。長春からはやはり石炭運搬用の無蓋貨車だった。錦州に着いた夜は各班ごとに自炊することになり、平鍋と精白した高粱が渡されたので、私と実験農場の栗山さんとで、かまどを作って炊事をしたのだが、どんなことをして食べたのか全然思い出せない。その夜は、三十人くらいで土間でごろ寝をしたことは覚えている。翌日、日本人の官舎だった所に移ったが、ここは板の間で、やっとゆっくり休めるようになった。北安を出発してから三十日くらいになり、疲労がたまっていたが、幸い誰も病気をせずに過ごすことができた。次男も生まれて五カ月にもなっていない

かったが、母乳が良く出たので健康だった。錦州にも十二、三日いたが、はつきりとは覚えていない。

錦州から葫蘆島コホトウに向かったが、列車は台車で、真ん中に荷物を置き、それを取り囲むようにして座り、振り落とされないように注意了した。

懐かしき故郷へ

葫蘆島でしばらく休んだが、いよいよ乗船となった。現地の人が名簿と本人を照合し、確認してから乗船を指示した。引揚船は一五〇〇トンくらいの旧海軍の駆逐艦で、機装は全部撤去されており、引揚船としての役目が終われば台湾に引き渡される運命にあるとの話だった。海上は大変に荒れたが、無事に博多湾に入り、二、三日湾内に停泊していた。

上陸時の荷物検査はアメリカ兵だったが、あまりひどいこともせずにパスしていた。持参した金は、等価交換で一人千円限度だった。三角小屋で一泊し、翌日、帰郷先ごとに班を作り、帰国列車に乗り一昼夜を車内で過ごし、やっと長岡駅についた。長い間一緒だった北海道出身の小西さん達と別れを惜しみつつ、

栃尾町行きの軽便鉄道に乗り換え、夕方に栃尾に着いた。そこで、家内の伯母の家に一泊させてもらい、翌日、家内の実家に行き、北安出発以来四十数日かかっていたの引揚げ行に終止符を打った。感無量であった。

引揚げ後の生活 再び開拓へ

帰国後は、家内の実家で厄介になっていた。義父は村長をしており、十六歳の長男がひとりで農業に励んでいた。私はその手伝いをしながら将来の事を考えていた。しかし、良い仕事もなかなか無く、やり切れない気持ちで月日が経っていた。その年は近年にない大雪で、毎日毎日、屋根の雪下ろしに追われていたが、なんとか役に立っていた。二月末、所用で生家に行く途中、荷頃村で布団袋を背負って休んでいる人に会い、よく見ると、五福堂開拓団の長營部落にいた諏佐さんだった。

諏佐さんの話では、北海道空知の鷹栖町に入植するとのことで、もし希望があれば県庁に相談してみたら、と言われたので、所用の帰りに新潟県庁の開拓課に寄り、話を聞いた。三月に現地から係員が来て、緊

急開拓の入植希望者を対象に説明会を実施するという
ことだったので、連絡を待つことにした。

昭和二十二年三月二十日の説明会によると、入植地
は下川村と標茶村の二村だけだった。下川村は畑作地
帯で水田もあるというし、標茶村は畜産が主体で、入
植地は以前、軍馬の牧草地であり、酪農も可能という
ことだった。下川村への希望者が多く、私も下川村を
申請して帰った。しかし後日、標茶地区に変更になっ
たとの通知を受け、家内と相談して標茶に入植する決
心をした。早速六月十二日単身で新潟を出て、十四日
に標茶に着き、県庁開拓課の吉井さんに引率されて多
和という所まで四キロメートルの道を歩き、根釧地区
開発協会の中村先生に迎えられて入植地の説明を受け
た。その夜は軍馬厩舎で乾草を布団代わりにして一夜
を明かした。翌日現地へ約八キロメートルの道を徒歩
で行き、さらに四月に入植していた新潟出身の小玉さ
んを訪ね、挨拶をしていったん多和に戻り、開発協会
から天幕を借りて、各人の荷物と資材を馬車で現地に
運んでもらった。川辺の平らな場所に天幕を建てて共

同生活を始めた。翌日から集団行動に入ることになっ
ていたが、新潟を出発する時は八戸十人だったのが、
一晚の天幕生活で四人が行き先も告げずに去ってしま
い、さらに一カ月経った頃に二人が道内の親戚を頼っ
て出て行き、結局残ったのは満州帰りの四人だけに
なった。

立木の少ない場所に火入れをして馬鈴薯を筋起こし
で巻き付けたり、共同居小屋の建設場所を探したりで
日が経っていった。七月になると補充入植者が四人新
潟から来たが、皆満州帰りで、阿倫河開拓団二人、朝
陽山開拓団一人、大阪開拓団一人で、心強かった。

八人で共同生活が始まり、共同居小屋の場所選定、
丸太組み十坪の笹葺き小屋を建設し、八月に天幕生活
から移り、二棟目の居小屋建設に着手した。八月中旬
には仲間二人の家族が来たので、私達四人は二棟目が
完成するまで再び天幕生活となった。九月になると、
仲間の一人が地元に戻校する小学校分校の代用教員に
採用されて退団し、七人となった。

冬が近づいたので越冬の準備を始め、木炭窯を作っ

て現金収入の道を考えた。未経験ながら共同作業によって軌道に乗り、翌年一月から個人経済に移行し、上多和地域立木伐採作業もするようになった。

春になると、配分された土地に仮小屋を建て、分散生活を始めた。五月には家に帰り家族を連れて来たが、家が完成するまで共同居小屋で生活をした。小川があったので水の苦労はなかったが、道路には苦勞し、標茶に用事があっても往復で丸一日かかり、不便だった。

乳牛の貸付を受けたり、自己資金で耕馬を購入したりして人力作業から畜力作業に変わり、生産も向上した。牛乳も、初めは遠くの標茶集乳所まで輸送缶を背負って運んでいたが、乳量が増えるに従って馬車運搬になった。その後、搬出道も整備されてトラック集荷となり、次いで現在のバルククーラーとなったが、入植初期の酪農全般の苦勞は並々ならぬものがあった。

いまひとつ大変だったことは、生活用水の確保だった。昭和二十七年に所有地の中に農道が通ったので住居を道路のそばに移すことにしたのだが、問題は水

だった。井戸を掘ることにしたが高台なので相当の深さを覚悟して、家内と二人で馬を使って作業を始め、二カ月以上かけて完成した。深さ三十一、二メートル、水量は豊富で水質も良く、夫婦協力しての最大の事業だった。三十八年に深井戸視察に来られた西川北海道開発庁長官が、私の家で馬を使った水汲みの実態を見て、「これは大変だ、何とかしなければ」と言われた。翌年から上多和地区上水道工事の測量が始まり、三十八年に完成し、家庭用はもちろんのこと、家畜への給水、牛乳冷却など多大な恩恵を受けた。思えば苦しい、水との闘いであった。

その後各種の事業が行われ、経営は一段と近代化された。配当地も入植当初の十町歩から逐次増えて、現在では五十三町歩となった。乳牛も百四十頭を飼育している。

北満を追われて傷心の引揚げ、それから再度の開拓に従事して五十三年の歳月が流れ、八十一歳になった。北満の荒野で命を落とし、西火犁、五福堂、そして北安とそれぞれの地で、墓標もない凍土の中に埋葬

され、永久に湖北の土となられた方々のことを思うと、やるせない気持ちでいっぱいである。只々、ご冥福をお祈りするのみである。

東安高女、血染めの日の丸鉢巻

青森県 森 勇 男

はじめに

私の本籍地は下北半島の一寒村であるが、両親は青森市に住んでいて、私はそこで生まれ少年期を過ごしていた。長じて青森市内の中学校を卒業して、旅順リョウシュンの師範学校に進学した。母は、私が遠く離れた旅順の学校に入るとは反対していたが、私は大きな喜びと希望を抱いて旅順に行った。

当時、国策の一環として満蒙開拓のための移民が奨励されていて、各県から多くの人々が開拓団員として、また青少年義勇軍として満蒙各地に送り込まれていた。しかし、そのような情勢下において開拓団の人

が一番に頭を悩ませ、心を痛めていたことに、子弟の教育問題があった。私もそのことを知り、師範学校卒業と同時に他のことは何も考えずに、開拓団員の子弟教育に若き情熱を燃やすことを決意して、開拓団の小学校で勤務することを希望し赴任した。以来六年間、開拓団の子弟と共に過ごしてきた。その間には、次から次と新しく開設される開拓団の小学校の開校準備にも度々派遣された。あるときは、三十数人の子供と一緒にになって、団の一家屋に寝起きを共にして越冬したこともあった。派遣されたり本校に戻ったりという経験を繰り返しながら、開拓団子弟の教育に情熱を燃やしていたが、昭和十九（一九四四）年になって、新しく満ノ国境に近い東安市に創立された、東安高等女学校の開校準備に携わり、教諭として女子教育に己の全知全能をぶつけることとなった。師範学校時代の恩師である戸川校長から親書を頂いての招聘だったので、喜んでではせ参じたのだった。ただ、その思いも終戦を迎えて消え失せてしまい、生徒を連れて引き揚げるという責任を負うこととなった。その苦勞は並大抵のこ